

ら、長週期のもの程(多分、どの SS Cyg 型星でも)、變光範圍が或る一定の増加を示す事である。此の事は更に歩をすすめて、Kukarkin と Parenago 兩氏により、(N. N. V. S., 4, 251, 1934) SS Cyg 型星と新星との間には、或る種の連繫をば形成して居るやうに考へられるものとして、この週期の増加につれ、變光範圍の増大する現象を論義し、相當自信を以て論斷されて居る。但し一言附記すべきは、彼等兩氏が、SS Cyg 型星中最小週期の星として見立てゝ居る AC And 星は、現在では星團型星に屬するものとされて居る點がやゝキズと云へぬ事はない。(AC And 星は、最初 Guthnick 及 Prager 兩氏より星團型と考へられたが、其後觀測が行はれた結果、各 Max の様子、極大光度、其の繼續期間等に不揃の點が多く見られるので、Lause 氏が、極端な短週期の SS Cyg 型の場合に相當すると考へたのである。然るに再三、最近に到つて、Lange 氏や、Florja 氏により、光度差も、週期も異なる二個の星團型星の合成である事が提唱され、其の一見不解な光度曲線の變化をば、見事に——多分誤りはあるまい——解決した。此の AC And 星の事は暫く別として、本論たる新星との關聯を、もう少し追究して見ると、現在までの所、能く觀測された新星中、僅か二個のみが、明確に週期的(いづれ SS Cyg 型星の場合以上に大ザツパな意味で)であると考へる事が出来るのである。即ち RS Oph と T Pyx 兩星である。強いて云へば第三番目の星として1667年に發見されたオリオン座の新星がこの中に入らない事はない。(この星は其後1750年、1892年に再増光した。光度は $6.0 < 12$) 第三星は暫く置いて、前の二星は Kukarkin 及 Parenago 兩氏によつて與へられた所の

$$\bar{A} = 0.63 + 1.667 \log \bar{P}$$

なる關係式によつて、能く表はされるのである。この $\bar{A}$ は變光範圍(光度差)が等級で、 $\bar{P}$ は週期が日單位で示されるのである。少し向ふ見ずではあるが、此の式をば外延すると、普通の新星及超新星の週期は 10^3 乃至 10^7 年といふ程度の値が出て来る。此の値は別個に夫々、兩型の新星の觀測された頻度や、光度等から見ると、全く無理由な出鱈目な數とも思はれないのである。其れ故に更に論を進めると、新星も週期的であり、從つて SS Cyg 型星と關係の成立が可能である事をば決して等閑に附してはならないと云ふ事になつて来る。(つゞく)

豆 觀 測 所 を 開 く

岐阜市溝旗町に私設天體觀測所を設けてゐる正村一忠君(本會員)は、小學の先生に星の話を聞いてから空に興味を持ち始め、商賣に力が入らぬと、お父さんから叱られたり、觀測に夢中になつて屋根から滑り落ち、機械や寫眞機をこはしたりしても、研究に餘念がなかつた結果、本會の木邊觀測部長に認められて會員となり、今度自費三千圓を投じて、同市長森天王寺山に觀測所を設けることになつた由。(或る新聞より、15—VIII—18)